１９９２年６月５日第３種郵便物承認　ＫＴＫ増刊通巻第 3820 号　2012 年６月９日発行（毎月１回 25 日発行）

KTK

NO. 82

後援会費郵便振替口座
０１０７０－７－３２１４５
あらぐさ後援会

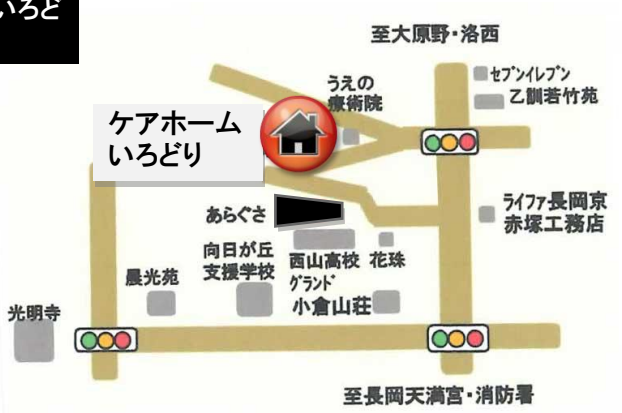
あらぐさ通信

編　　集　あらぐさ後援会
編集協力　社会福祉法人あらぐさ福祉会
〒617-0813　京都府長岡京市井ノ内広海道 42－３
TEL 075-953-9212　FAX 075-953-9215

新しい生活が はじまります。

あらぐさは、「共同作業所あらぐさ」として、26年前、光明寺門前の1軒の民家からスタートしました。2005 年、現在の地で法人施設として認可され、本年、新しい事業所として「ケアホームいろどり」を開所します。

６月２３日（土）
あらぐさカミングデー
午前 11 時～午後３時まで
ケアホームいろどり、障害福祉センターあらぐさを、ご覧いただけます。どうぞ皆様、お越しください。**詳細は付録（別紙）参照**



やさしい笑顔に支えられて

自立への一歩――ケアホームに入ります

障害福祉センターあらぐさに通うのぞみさんは26歳です。「あらぐさ」では、「ゆったりと接することができる」Aグループで、大好きなのこぎりを使った木工や牛乳パックでの紙すきの活動、歩行訓練などに取り組んでいます。リトミックや音楽などは、Aグループ以外の人たちと一緒に活動をしています。

「あらぐさ」に入ってからののぞみさんは、人と関わることや、スーパーなどへの外出もスムーズにでき、世界が広がってきたと、お母さんは話されています。

（取材＝前田幸子・真殿尊子）

治療や療育の場 求めて東奔西走

のぞみさんには、知的障害のほかに肢体の障害があります。また、いつ起きるかわからないてんかんの発作があります。時には重積発作になることもあります。京都府立病院と京都市立病院、そして近所の内科のお医者さん、医療との関わりをなくすことはできません。

のぞみさんは、妊娠30週、922gで誕生しました。お母さんの妊娠中毒症がきつかったからです。お母さんは、先に退院。病院の保育器の中で育つのぞみさんに母乳を届け続けました。3か月が経ち、2500gにまで成長したのぞみさんはやっと退院することができたのでした。

その後、のぞみさんの治療や療育のために、お母さんの東奔西走が続きます。

誕生の翌年に点頭てんかんの発作があらわれ、難治性てんかんと診断されます。ステロイドによる治療を受け、副作用が出たこともありました。3歳のとき、追視をしないことが気になり、京都ライトハウス（京都市北区）にある「あいあい教室」へ通いましたが、目の機能ではなく脳の機能の問題ではないかということで、聖ヨゼフ整肢園（京都市北区）に母子入院してボイタ法による訓練を受けました。そして洛西愛育園（京都市西京区）に入園します。

この間、出産時の滋賀県栗東から京都市の洛北、洛西、そして、向日が丘養護学校（現在、支援学校）への入学を希望して長岡京市に転居しました。障害児学童保育の「わっしょいクラブ」でがんばっておられる人たちの話を聞いたのがきっかけとなりました。入学後も、お父さんの仕事の関係で、3年間アメリカで暮らしたこともありました。

行く先々で障害をもつ子のお母さん方と知り合いになり、お互いの情報を交換できたことが、お母さんに大きな力をくれました。ことに、障害児学童の時も無認可の「あらぐさ」時代も、先輩のお母さんたちがやさしく迎え入れて励ましてくれました。今も大切な仲間です。

この度、あらぐさが開設する「ケアホームいろどり」への入所が内定しました。親が元気な間にケアホームに入ることができ、自立に向けた一歩として、本人にとっても、親にとっても嬉しいことだと話しておられます。

家庭での生活
地域の中で楽しく

「あらぐさ」から帰宅すると、「じゃじゃまる」「ぴっころ」「ぽろり」が登場する『お母さんといっしょ』のビデオを見るのが、お気に入りの時間です。足をあげて体操のような感じで楽しくリズムをとっています。それでも、お母さんは、いつ発作が起きるかわからないので、のぞみさんから目を離すことができず、側に寄り添っています。食事の準備をする時は、仕方なくのぞみさんにその事を説明し、キッチンで待ってもらうことになります。

外出時は車椅子を使いますが、室内では伝い歩きや手を引いてもらって歩きます。

ヘルパーさんと一緒に、長岡京市内のカラオケ店に行くこともあります。「じゃじゃまる音頭」や「アブラハムは七人の子」などが好きで、マイクを2本持って歌い、ヘルパーさんにも「歌って！」と注文するそうです。

また、日中一時のサービスを使い「ひまわり園」で過ごし、お風呂に入ることもあります。月に1度は家から離れて「ひまわり園」や「たんぽぽ」（ＮＰＯてくてく）でお泊まりをすることもあります（ショートステイ）。

お父さんと お母さん

のぞみさんのお父さんは、小児科のお医者さんです。「病気の子ども達の治療」に全力を注いでいます。

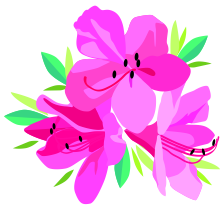
お父さんは忙しくて殆ど家にいなかったので、のぞみさんのことは「一人でしょう」とお母さんは頑張ってきました。

そんな中でも、「自分の時間も大切にしたい」と、養護学校時代は、パン作りの勉強をして、将来は、のぞみさんとパン屋さんを開業しようと思ったこともありましたが、教室に通う時間が作れず断念。今は、フラダンスサークルでフラダンスに熱中する時間をもっています。

障害のある人と接することが多いお母さんにとって、人生の先輩も多くおられるサークルの活動は、いろいろな人の話を聞いたり、自分の子どものことや「あらぐさ」のことも話せる大切な場となっています。

「あらぐさ」の製品を買ってもらったり、署名にも快く協力してもらえます。

「親が亡くなったあとも、のぞみらしく地域で暮らしていける」ことを願って、これからも、いろいろな人たちとかかわり、支えをもらいながら、「親子で頑張っていきたい」と話しておられます。



あらぐさの活動

きのこーず 結成

原木しいたけづくり

プロジェクトきのこ

2009年、デイセンターあらぐさ2のメンバーと職員の二人が、ホームセンターで買ってきたしいたけの原木で、しいたけ作りを始めました。それまでは園芸の活動で、イチゴやスイカを植えていましたが、「もっと食べられるものを作ってみたい」という熱意をもって挑戦しました。

〝プロジェクトきのこ〟と銘打ち、説明書を見ながら、かなづちで叩いたり水をやったりしたのですが、しいたけは1つも出てこず残念な結果となりました。来る日も来る日も「出てないなぁ」と原木を確認するメンバー、「なんでかなぁ」と職員は首をかしげました。

そんな時、乙訓障害者支援事業所連絡協議会の「障害者支援事業所自主事業視察研究」で、しいたけ作りを本格的に行っている城山共同作業所さん（南丹市八木町）へ見学に出かける機会を得ました。城山共同作業所さんでは、近所の山を使って、600～700本の原木しいたけ生産を行っています。そこで、しいたけの育て方・適した環境・収穫時期などを教えていただきました。

その後、城山共同作業所さんの紹介で、船井林業友の会主催「しいたけ植菌研修会」に職員が参加し、原木しいたけ作りについて学びました。

ちょうどその頃、京都市西京区大原野にあるビニールハウスを借りられることになりました。ビニールハウスでうまくしいたけを育てられるかどうか不安もありましたが、とにかくやってみようということになりました。そうして、幅6メートル×長さ25メートルある〝きのこハウス〟でのしいたけ作りが始まりました。

原木200本から

いざ、原木しいたけ作りを始めると決めたものの、全くの初心者で何をしたらいいのか分からなかったのですが、城山共同作業所さんが全面的に協力して下さいました。現在も引き続きお世話になっています。

2011年3月、原木にしいたけ菌を入れる〝菌うち〟を、城山共同作業所さんと一緒に行いました。あらぐさメンバーと職員が八木町まで出張し、原木200本に穴を開け、菌をつめました。菌うちした原木はそのまま置かせてもらい、6月に再度八木町に出かけ、山に〝伏せ〟（並べ）ました。

そして、しいたけが出始める9月の末に、原木をあらぐさのハウスに運び込みました。しいたけ菌は直射日光が苦手で、40℃以上になると菌が弱ってしまいます。山は夏場涼しく冬は暖かいので、しいたけ菌にとって快適な環境なのですが、ハウスはそうはいきません。メンバーと職員で、ハウスの天井に遮光ネットを取り付けたり、周りをよしずや防風ネットで囲ったりしました。

プロジェクトきのこの一人だったメンバーは、新たに〝きのこーず〟を結成し、リーダーになりました。今度こそ、しいたけが出てきますようにと、菌うち・伏せ・防風ネットはりと張り切って活動していました。

初めてのしいたけ

ハウスに原木が来てから、水やりや草ぬき等の手入れを行っていましたが、

しいたけが出てくる気配がありません。メンバーも職員も「本当に出るんかなぁ」と、緊張の毎日でした。そして10月11日、「出てないなぁ」としゃがんだ瞬間、原木の裏側に丸いしいたけを発見。初めての収穫（49グラム）となりました。

初めは1個か2個の収穫でしたが、11月・12月になるにつれ、少しずつ数が増えてきました。飛び出ている小さなしいたけを取ってしまったこともありましたが、小さなしいたけがだんだん大きくなってくるのを楽しみに、手入れを行いました。自分が収穫すると張り切るメンバーや、収穫したしいたけのかさをなでて満足そうなメンバーなど、それぞれしいたけ作りを楽しむ姿がありました。中には、1つで150グラムを超えるしいたけがあり、「おばけしいたけ～」と盛り上がりました。

それなりに収穫が見込めるようになったので、年明けからは原木しいたけの注文販売を始めました。総収穫量が未知数なので、3個入り1袋のお試し販売となりました。きのこーずリーダーを中心に、チラシ作りや営業・配達、集金などを行いました。また、しいたけの試食会を開いたり、スケッチをしたりもしました。自分たちが作ったしいたけの感想は、「（しょうゆ味で）おいしかった」そうです。

そして、これから

原木しいたけはとても好評で、たくさんの方からご注文をいただきました。収穫量に限りがあり、リピート注文にはお応え出来ないほどでした。今年度はさらなる収穫増を目指して、原木の数を100本増やすことにしました。そこで2回目の菌うちを、2012年3月に行いました。前回は、原木を運ぶ係だったメンバーが今年は菌を入れたいと立候補し、一年越しの希望をかなえました。

秋から冬そして春にかけての収穫も終わり、きのこハウスの原木は一休み中です。次は、秋にまたしいたけが出てくる予定です。今年の夏は、初めてハウスで原木を扱うことになります。熱いハウスの中で大丈夫なのか、暑い夏をどう乗り切るか、対応を考えているところです。

まだまだ始まったばかりの原木しいたけ作りですが、自分たちの育てているものがだんだん大きくなっていく楽しみや手応えを実感しています。天候や気温など思い通りにいかず、苦労することもありますが、その分しいたけを発見した時や収穫した時の喜びは大きいものです。原木しいたけ作りは、メンバーにとって思い入れのある活動の一つになっています。

きのこーずの原木しいたけ作りは、いろいろな人の協力や支えがあって実現しました。そして、多くの反響をいただいています。これからも、原木しいたけ作りを通じてたくさんの人とつながり、じっくり丁寧に作ったものを、自信をもって出していきたいと思います。

最後に、きのこーずリーダー垣内望美さんからのコメントです。

「水色のあみ（防風ネット）はって、がんばった
（集金の）はんこ、おしてる
しいたけは、これ位（両手を広げて）いっぱいとれた
また秋にとれたら、よろしくお願いします」

（あらぐさ職員　中山恵美子）

ケアホーム いろどり7月オープン

ケアホームの開所準備に取り組む、職員の粟野さん、佐名木さんに聞きました。

「ケアホームいろどり」はどんな所にありますか――

障害福祉センターあらぐさから歩いて約3分。東と北側は民家が隣接し、西側は竹林という土地に、4棟が建てられています。

住宅地と竹林がちょうど交わる閑静な地域です。前面の道は、新緑の季節には、乙訓の竹林散策を楽しむ人たちが行き交います。最近すぐ近くにコンビニができました。

入所される方々はどのような方ですか――

20歳代から50歳代の人たち、27人です。皆、あらぐさや他の日中活動の事業所に通っています

無認可施設あらぐさの開所から26年間、この日を待っていた、あらぐさ1期生のOさん、Mさんも入居します。OさんもMさんも、あらぐさがとにかく大好き。これまでの長い年月、あらぐさに通い続けるためには、本人やご家庭への様々な支援が必要でした。ケアホームの制度の充実など、まだまだ課題はありますが、念願のホーム入居を心から喜んでくれています。

設備などで工夫しているところは――

4棟全体では、耐震・耐火建築、オール電化、スプリンクラー設置など、地震や火災に強い建物になっています。

車いすでの生活スペースを重視した棟、シンプルな設計の棟、多目的スペースのある棟、事務部を設置など、入居する方たちをイメージしたり、使用目的の広がりを考えてつくりました。

開所に向けて、どのように進めていますか――

7月開所をめざして、いろどりの職員たちは、入居される27人のこれまでの暮らしぶりや体調などを、家庭訪問をしてお聞きしてきました。

また、日中活動の様子も見ながら、介助、食事、コミュニケーション、気持ちの機微などなど、一人ひとりを知りながら、ホームに帰ってからの生活が穏やかで、ほっこりと楽にできるための援助、支援をどう組み立てていったらいいのか、日々奮闘中です。

開所後は、体調の状態により一泊から始め徐々に泊数を増やしていく人もいれば、初めから4泊する方もいます。

4人から5人の共同生活ですが、一人ひとりの生活のペースを大切にした生活をつくっていきたいと思います。

「いろどり」に続く「暮らしの場」づくりについて

法人の中長期事業計画では、27年までにケアホーム4棟を建設する予定でしたが、かなり短縮されました。しかし、今回入居を希望されていても、入れなかった方たちも沢山おられます。次の「くらしの場」をどういうものにしていけばよいか、法人では今後の新たな計画を立てていくことになります。

また、中長期事業計画の中の相談支援事業についても、具体的計画を立てていきたいと思っております。

（法人事業推進室・角）

あらぐさ後援会

総会報告

ケアホーム「いろどり」の完成が間近となった四月二一日に総会が開かれました。

野々下会長の挨拶、あらぐさ福祉会の村山統括事業長からケアホーム建設の報告がありました。その後審議に入り、提案はすべて承認されました。

取り組んできた主な事業

❶ケアホームに関わっての学習会 ❷「あらぐさ支援募金」が四四〇団体・個人より一，九二七，五一一円の募金が寄せられた ❸物品販売 ❹「あらぐさ通信」の発行 ❺会員数は五五九団体・個人でした。

本年度の主な事業

❶後援会主催で地域との交流を目的とした催しを一〇月二八日（日）に開く ❷「くらしの場」づくりの施設整備を支援する「あらぐさ支援募金」（目標二〇〇万円）をすすめる ❸後援会独自の資金作り ❹「あらぐさ通信」の発行 ❺一〇〇〇名の会員・支援者を広げる。

新しい役員

会長　野々下靖子
副会長　中川千津子　増田康夫
事務局長　大槻昭
役員　粟田紀江　粟野賢　稲葉薫　角摂子　永崎靖彦　中島悠太　松村誠　真殿尊子　丸岡正子　三谷文菜　安武真理
会計　上田素子
会計監査　大江文子　宋明子
外部監査　中野修

寄付金を贈呈

議事終了後、野々下会長よりあらぐさ福祉会西田理事長に施設設備を支援する寄付金二，三二七，五一一円を贈呈しました。

東日本大震災・福島支援報告

総会2部として東日本大震災・福島支援の報告会が開かれました。ボランティアとして現地支援に入った職員の粟野さん、森下さん、中島さんの三名より写真、資料を交えてお話していただきました。

昨年の三月十一日以降、あらぐさからは四名の職員が五期に渡って福島支援に入りました。震災直後四月の状況は、障害者の安否確認が出来ない状況で、「手帳」所持者名簿による確認が大切であった。昨年七～八月の段階では、作業所の再開、新しい拠点づくり、職員人手の確保、仕事づくり等がすすめられた。その仕事の一つが被災地支援缶バッチの製作です。あらぐさで販売しています。今年二～三月では、がれきの山は手つかずの状態。施設は人手不足で、昼夜施設で支援をした。作業所にまだ来れていない人がいる。

きょうされんでは三ヶ月毎に福島支援の対策会議を開き支援内容を検討している。

（支援に入った方、送り出したあらぐさの皆さん、本当にご苦労様でした）。

２４年度あらぐさ後援会更新・加入、「あらぐさ支援募金」をお願いします。（同封の用紙をご利用ください）

ご入金と行き違いになりました際は、ご容赦ください

平成２３年度後援会会計　決算

収入		支出	
繰越金	165,413	通信経費	271,345
会費	829,000	事業費	137,711
物品販売	38,450	事務費	95,509
利息	84	予備費	0
		法人寄付	400,000
計	1，032，947	計	904,565
収支差額			128,382

＊支出の400,000円はあらぐさ福祉会への施設設備を支援する寄付です
＊収支差額は24年度会計へ繰り越します

平成２４年度後援会会計　予算

収入		支出	
繰越金	128,382	通信経費	150,000
会費	1000,000	事業費	200,000
物品販売	50,000	事務費	100,000
		予備費	128,382
		法人寄付	600,000
計	1,178,382	計	1,178,382

後援会への加入・募金
ありがとうございます
ご協力いただいた方々
１月１１日～３月３１日
敬称略・順不同

秋山喜美江　髙橋　光子
芦田　昌夫　田中　久美
粟津　温重　谷　早苗
石橋　雅子　田村　光春
泉　千恵子　築出　邦子
井上世津子　冨田　孝子
井上　陽子　内藤　基雄
射場　隆　仲岡　務
上田　和美　中川　慶子
江川　哲　中川　淑子
大泉　裕子　中島　伴美
大江　貴光　中村　隆
大槻　昭　中山　光雄
大橋　祐子　夏川　久子
岡田　淑子　西田　三男
小野田照代　野畑　光代
陰山　三鈴　橋爪　早苗
桂　武士　長谷川長昭
金森たえ子　馬場かね子
川﨑　啓司　早川美智子
川瀬　明子　阪東　道夫
川畑　栄子　氷川　千津
川辺　孝子　久江　公子
岸　陽子　平松佐知子
金原　道雄　本田　章子
久保淵静子　桝井　良子
栗本　葉子　松本　英里
河本　緑　丸岡　勇毅
小林　保太　三浦　次郎
近藤　健二　水嶋　雍子
佐伯　敏子　三橋　眞子
佐々木成子　南　弘一
佐名木直子　宮田　啓子
地蔵院福本哲了　森山　正博
白石　正久　安井　芳幸
杉本　裕美　山崎　諭
杉山　正道　山中　憲一
住田　珠江　山元　淳子
関　剛　山本　眞弓
反橋　滋夫　横山　実香
太寿堂伸一　吉岡　恭子
高橋　明裕　吉本　久枝
乙訓地区労働組合協議会
片岡診療所　片岡　卓三
要建設株式会社
日本基督教団西が丘教会
ぱんだ企画
ベーカリー セルフィーユ　村上　泰之
(有)スマイルケア
　代表取締役　荒井　祐子
匿名　１４名

あらぐさと私

大震災被災地支援に参加した

障害福祉センターあらぐさ職員
森 下　純 平さん

日々やりがいを感じて・・

「この仕事をするんだな！」と福祉の分野に〝運命〟を感じた森下さん。「障害者の方が暮らしやすくなるように」と漠然と考えていた大学時代に、就職フェアであらぐさと出会い、あらぐさの理念と自分の想いが一致したのが、就職のきっかけです。

あらぐさで働き始めて５年目。昨年から重症心身障害者のグループに移り、また新しい利用者さんとの日々に没頭しています。利用者さんとの毎日は日々勉強で「体調や表情の小さな変化をみながら、利用者さんの想いがわかった時は楽しい」と、やりがいを感じているそうです。何か質問すると、キックで答えてくれる利用者さんと笑いあったり、活動の中でうまくいった時は、「やったぁ、できたー！」と利用者さんの想いを感じたり、日々〝絆〟を深めています。

そんな森下さんは、学生時代にバレーボール部で活躍。試合前に肘を脱臼し、試合出場を逃がしましたが、キャプテンとしてチームをまとめました。責任感が強く、趣味を質問すると、「仕事(笑)」と答えてしまうほどです。そんな森下さんの今後が期待されます。

南相馬でうまれた気持ち

去年の夏、福島県の南相馬にある施設へ、日中の支援に入りました。現地に残る利用者の方々と、新たな仕事作りのために缶バッチ作り等にも取り組みました。その缶バッチを通じて、全国とつながっていければという願いが込められています。

「避難することを選ばず、〝南相馬で暮らしていこう〟と頑張っておられる現地の方の姿を見ると、〝何か負担を軽減できれば・・・一緒に頑張ろう〟という気持ちになった」と、継続してボランティアを行うことが大切だと森下さんは話します。

1992 年6月5日　第3種郵便物承認（毎月1回 25 日発行）　2012 年 6 月 9 日発行
KTK増刊通巻第 3820 号
発行所　京都障害者団体定期刊行物協会
〒602-8143 京都市上京区堀川通丸太町下ル中之町 519　京都社会福祉会館4階
京都難病連内　　発行人　髙谷修　　頒価50円（購読料は会費に含まれています）